

箱庭

三浦朱門





箱 庭

三浦朱門

箱庭

昭和四十二年九月二十日 第一刷

定価四百九十円

著者 三浦朱門

発行者 上林吾郎

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
(電話)二六五一一二一一

印刷 大日本印刷

製本 中島製本

製函 加藤製函

*万一乱丁落丁の場合はお取替えいたします

箱

庭

裝
幀
綠
川
広
太
郎

第
一
部

I

ボタンという木戸のしまる音が、木俣学ウツナガの意識の闇の中にさし通って、

「ああ、修オサムが出勤するんだな。」

と、眠ったまま考えた。次に、

「何もあんなに木戸を乱暴にしめなくたって。」

と思うと、そのかすかな不満のために目がさめた。寝たまま、開け閉めできるようになっている、ベッドの脇の窓が明るかった。目をさましたのは、木戸の音もさることながら、この東向きの窓に雨戸を入れなかったためにちがいない。昨夜二時ごろ電気スタンドを消

す時、外が暗かったので、雨戸のことをすっかり忘れたのだ。

学は窓の反対側にあるテーブルの上の腕時計をのぞいた。まだ六時間も眠っていない。もう一度、眠りなおすべきかもしれないなかった。

学は窓に背をむけて、毛布をかぶった。あと一時間ほど眠れたら、……。

すぐそばで鼻歌が聞こえた。窓の外、ほんの二三メートルと思われる。修の妻の百合子にちがいない。学はしばらく、その歌声を毛布の外に追いやろうとして、頭からすっぽりかぶったが、声は依然として、眠ろうとしている意識を刺戟しつづけるのだった。

雨戸を閉めなければ、やがて朝日もさしこむことだし、眠れる訳がないと、学はベッドの上に起き直って、曇りガラスの窓を開いた。この窓は雨戸を入れると三重窓になっている。最初は曇りガラスの戸と雨戸だけだったのに、冷房機を入れた時に、窓をしめたまま、庭が見られるようにと、透明なガラス戸をつけ加えたのだ。

歌声はすぐそばに聞こえるのに、百合子の姿は見えなかった。枯れた芝と、花壇の菊やダリヤが学の目にはいった。

突然、四角い窓の下から百合子の頭が現われて、そのままダリヤの花壇の方へ歩いていった。彼女の歌は二三メートルどころか、直線距離にすれば、一メートルもない所から聞

こえていたのだ。彼女は学の窓下のコスモスを眺めていたにちがいない。泥がついたのか、両手をバラツと開いて、スカートにふれないようにしている。

百合子は学の窓の方を見もしない。最初見た時に、曇りガラスの戸がしまっていたので、いまでもそのまま、部屋の中には誰もいないと思っっているにちがいない。学は曇りガラスの方を閉めないなら、大声で挨拶した方がいいと思った。見られていない、と信じきっている人が見えるのは、それだけで、人の秘事を犯しているような気がする。

しかし学は寝起きなのだし、もう一度、眠ろうとしているのだ。人に挨拶するような状態ではない。そして、雨戸をしめようとして曇りガラスの戸を開けたのだから、その目的を達せずに閉めてしまうのは、逆に百合子から、自分の当然の権利を犯されるような気がする。学はしばらく不機嫌な顔で、じつと百合子を眺めていた。

突然、彼女は深く腰を曲げた。菊の茎に何か異常を見つけたらしい。近ごろのスカートは短い上に、百合子は特にそういうのを好むから、真後ろにいる学からは彼女の脚が三分の二ほども見える。今、ふりむかれては、大変に具合が悪い。学はあわててガラス戸を閉めた。勢いよく閉めすぎたために、引き戸はパチンと柱にぶつかってはねかえり、一センチほど開いてしまった。戸と柱のぶつかる音は、百合子の耳にもとどいたらしい。げげん

な顔をしてふりかえり、一瞬、学は百合子と視線が合った、と思った。

しかし彼女の顔は何の表情も見せずに、目は別な方角に向けられた。彼女は一センチの戸の開きに気づかなかつたのだ。やがて、彼は元の姿勢にもどつた。学は、枕を脇にかかえるような横向きの姿勢になった。そうするとせまいすき間から、百合子がよく見えるのだ。彼女がガラス戸がすこし開いていることに気づいたところで、彼の部屋は、ほかの雨戸が全部しまっているから、暗くて何も見えないであろう。

そうやって、弟の妻をのぞいていることがやましくもないこともなかつた。しかし雨戸を閉めたいという目的を妨害されたという不満がある。それにのぞきたくなるほど美的な体ではないから、見たって悪くないという気がするのであつた。

百合子はちよつとO脚の気味があつた。ポツタリ肉のついた腿ももが二本、太い指のように並んでいて、膝と膝の間は雑誌がはさめるくらいすいている。そしてふくらはぎの肉が脚の外側からはりつけたように並んでいて、それが次第に細くなるあたりでは一点に集るような感じに、左右の踵がピタッと合っている。学が今正面に見ているのは、膝の裏側の部分だつた。日に当たらないために生白く、のっぺりと平らで、青い血管が何本か見える。形も色もあまりにも無防備で、つい先刻まで、そこに何かがはりついていたのを、むりやり

にはがして、はじめて外気にさらされた、という感じがする。

百合子の脚を見ている学の心が、必ずしもエロティックなものでない証拠に、彼の心に嘲りに似た気持はおこつても、欲望のたかぶりは感じられなかった。彼はテーブルの下の段にある小型の双眼鏡をとった。元々、これは庭に来る野鳥を観察するためのものだったが、そこに修が家を建ててからは、使うこともあまりなくなった物である。

はじめ、カレー色と浅みどりどりと、あせた紅がらの縦縞の布地が見えた。ウールらしいが、まるで粗い木綿地のように見える。裾にいつ付いたのか、つぶれて乾ききった飯粒がへばりついている。ほとんど一メートルと離れない所で見ると近さだった。

腿ももには毛は一本もないが、それでも毛穴は一つ一つ小さく隆起している。鮫肌さめはだというのはこのことだろうか、と学は考えた。その隆起は日にさらされることのすくないところでは少しずつ赤らんで、膝の裏あたりでは、バラ色の発疹のようにも見える。しかし毛穴の隆起はふくらはぎより下になると、急激にすくなくなり、すべすべした小麦色の肌になっている。

学は自分がいくらかの優越感をおぼえるだけで、劣情がおきないのを、むしろ誇らしく思った。医師が仕事に打ちこんでいる時、きつと今の自分のような気持で、患者の体を眺

めるにちがいないと思った。双眼鏡の視野の百合子が急に動いて、見えなくなったので、学は肉眼で戸のすき間を眺めた。彼女は花壇にそって歩いている。そして今、学に横顔を見せてしゃがみこんだ。そういう姿勢になると、彼女の肉体の欠点がほとんどかくれてしまい、背中、尻、腿の作る線がひどく肉感的になった。

学は双眼鏡をテーブルにもどし、昨夜、読みかけていた本をとりあげた。今日の朝までに、二枚の書評を書かなければならない。そして肉感的に見えた百合子のイメージを頭から追放しようとした。彼女を意地悪く眺めている限りでは、たとえのぞき見であろうとも、不徳とは思えないのだが、彼女に性を意識することは、不倫なのだ。百合子は弟の嫁なのだ。

彼の目はページの活字を追っていたが、頭の後ろの方では、百合子のこと、というよりも、不倫のことをなおも考えつづけていた。

百合子と会ったのは、修が結婚する一年ほど前だった。彼女の脚を見たことが、学にその時のことを思い出させる。初夏のころだったと思う。スリットのはいったスカートが流行した年で、お尻がスポツとはいるような学の家ソファにすわった百合子はしきりにスリットとその下に顔をのぞかせているクリーム色の下着を気にしていた。

彼女が気にするから、学もつい気になった。弟の恋人なのだから、そんなことを気にしてはいけなと思うても、紅茶のカップをおいた手を、すぐそちらに持っていくので、学の視線もつい、手の動きについて、そのあたりまで行ってしまふのだ。

百合子が帰った後で、学の妻の季子は、

「露出狂みたいな人ね。すきとおりそうなブラウスなんか着て。」

「そうだったかな。」

学はぼんやり答えた。そう言えば、ブラウスの下に、くつきり下着が見えたような気もするのだが、彼の記憶に残っているのは、スリットばかりだった。きつと自分はそこばかり見ていたにちがいない、と思うと、学は自己嫌悪にとらわれた。今ごろ、修は百合子に言っているにちがいない。

「どう思う、兄貴を。」

「そうね、いい方そうね。知的で……。でも、ちょっとね……。。」

「ちょっと?」

「ええ、ちょっと。」

「ちょっと、何だい。」

「何でもない。」

彼女は学を痴漢だと言いたいのを、おし殺そうとする。

「言えよ！」

「ううん。何でもない。木俣家は弟の方がいいわよ。」

修はきつと顔を赤らめて答える。

「可哀そうに。あれで評論家としては、有望らしいぜ。」

「そうでしょうね。でも、お兄さまって方、じつと見ているだけで、行動する方じゃないわね。」

この会話は、学が組みたてた架空のものではあったが、まるでテープレコーダーに吹きこんだように、学がくりかえし心の中で聞く会話だった。見るだけで、手を出さない、という百合子の言葉は、学自身の自己批判なのだが、まるで彼女自身から言われたように、この言葉を思い出すと、カツと耳が熱くなった。一面ではそれはスリットばかり見ていた自分を責める言葉ではあるが、またそれは、自分の生活態度に対する反省でもあった。

結局、彼は評論家としても、逃げ腰の半端^{はんぱ}仕事しかしていないから、軽評論家などといわれる。いやエッセイストという肩書がつくことの方が多い。浮気をするのだって、お粗

末なバーの女と、まるで遊園地でジェット・コースターにのるような遊びしかりなものであった。その時のスリルがどんなに本物に見えようと、所詮、それは入場料をはらつての上であり、重力を利用した安全なスリルなのだった。

気のせいか、百合子は、決して学に打ちとけなかつた。話しかけても、ハッと目を見はつて、驚いたような表情をし、それからいねいで、よそよそしい答え方をするのだ。たまに修の家でお茶など御馳走になる時、学が、

「もう一杯。」

というと、修は、

「おい、ユリ、兄さんにお茶。」

というものの、自分で学の茶碗を持って立ち上り、台所で百合子に入れさせ、また自分で持つてくるのだった。それは兄に対する敬愛の気持から、妻にさせるよりも、自分から立とうとしていることはわかるのだが、学は弟もまた百合子と自分の間をへだてようとしているのだ、と疑つてみたくなることもあるのだった。

学が結婚したころ、修はまだ学生だった。戦争の混乱がやっと収まりかかったころだったから、学夫婦も修も、両親の家に同居していた。学が外出から帰つてみると、もう深夜

なのに、修が季子と一緒にこたつにはいつて映画や恋愛の話をしていることがよくあった。修は熱心に、

「こういう場合、女の人はどうなのかなあ……。」

と、かなりきわどいことを、季子にたずね、彼女の方も、

「そうねえ、人によってちがうけれど、あたしの友達で、こんなこと言った人がいたわ、……。」

というように真面目に答えてやっていた。

そして季子の関心が帰ってきた学の方にむいてしまうと、修はつまらなそうに、あくびをしながら立ち上り、

「おやすみ。」

といって、自分の部屋に引きあげるのだった。いや、そればかりでなく、新しいダンスのステップをおぼえたといって、修が季子と抱きあって踊っていたこともある。

だからといって、修と季子が怪しかったとは、学は一度も考えたことはなかった。二人が親しそうなのは、殊と一緒に踊っているのは、不愉快でないことはなかったが、学は微笑して、そういう二人を見ることにしていた。学たち兄弟の家には、女おんな気きというと、お手